

最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか2

登場人物紹介

ジュリアス

パリスタン王国の第二王子。
超優秀な王位継承者でありながら、
人をからかって遊ぶのが好きな
腹黒い性格の持ち主。

レオナルド

スカレットの兄で、
ジュリアスの腹心の部下。
破天荒な妹と上司のせいで
胃痛に悩まされている。

スカレット

時を司る神クロノワの
祝福を受けている公爵令嬢。
その力と拳で数々の悪を成敗して
きたことから、「救国の鉄拳姫」や
「撲殺姫」などと呼ばれている。

ナナカ

獣人族の諜報員。
ヴァンデミオン公爵家の
執事として仕えている。

パラガス

聖女守護騎士団の団長。
熱血タイプで、部下からの
信頼も厚い。

サーニャ

ディアナ聖教団の聖女。
スカレットのことを
「お姉さま」と呼び
慕っている。

テレネツツア

スカレットの婚約者だった
第二王子カイルをそのかし、
婚約破棄させた張本人。
その罪を問われ、王都から
追放されたのだが……？

ディオス

聖女守護騎士団の筆頭騎士。
飄々とした性格の裏には、なにやら
秘密がありそうで……？

目次

第一章	私にだって、可愛げくらいありますわ？	7
第二章	死ぬほど痛いだけですわ。	26
第三章	断固としてお断りです。	96
第四章	正直、昂ぶりを抑えられません。	143
第五章	私も好きですよ。	187
第六章	貴方達にとつての悪魔となりましょう。	235
第七章	首を洗って待っていてくださいな。	280

第一章 私にだって、可愛げくらいありますわ？

「レオお兄様。私、温泉旅行に行きたいと思っていますの」

「で、今度は誰を殴りに行く気だ、我が妹スカーレットよ」

古い紙の匂いが香る、ヴァンディミオン公爵邸の書斎のこと。

椅子に座ってティーカップを傾けていたお兄様——レオナルド・エル・ヴァンディミオンは、私が告げた休暇の予定に難色を示されました。

「お兄様ったら、またそんなに眉間に皺しわをお寄せになって……。私はただ、この休暇を利用して温泉旅行に行きたいと申しているだけですわ。それなのにお兄様ときたら、まるで私が新しい獲物を見つけた肉食獣であるかのような言い方をなさるのですね。そんなに自分の妹が信用ならないのですか？」

そう言いながら顔を伏せ、よよと泣き真似をしてみます。

そしてダメ押しに、小動物のような上目遣いで一言。

「私、悲しいです」

しかし、そんな小細工がお兄様に通用するわけありません。ティーカップをテーブルに置いた

彼は、ため息をつきながら口を開きました。

「見え透いた嘘を……。売られていく仔牛のような目で、憐憫の情を誘っても無駄だ。そういったやり口には、昔から散々騙されてきたからな」

お兄様は半目で私を睨むと、自首をうながすように語りかけてきます。

「怒らないから、正直にどこへなにをしに行くのか言いなさい。うしろめたいことがないなら言うだろう？ まあ、あるからこそ誤魔化しているのだろうが……」

はなから嘘と決めてかかる、この態度。まったくもって解せませんわ。

まあ、旅行に出かけた理由は温泉に行く以外にもあるのですが……うしろめたいことなど、神に誓ってこれっぽっちしかありません。

「レオお兄様は、仔牛を売った経験がおりなのですか？ ダメですよ、そんなことをなさっては」

「仔牛が可哀相だとしても言いたいのか？」

「いいえ。牛は乳からお肉、皮や内臓にいたるまで、まったく無駄のない家畜です。ちゃんと大きくなるまで育てて、余すことなく絞り取らねばもったいないではありませんか」

人差し指を立てて語る私の様子を見て、お兄様が呆れたようにつぶやきます。

「……お前はもう少し、可愛げというものを覚えたほうがよいと思うぞ。なにかという口より先に手を出し……」

まあ、ひどい。私にだって、可愛げくらいありますわ。

口より先に拳が出るのも、ちょっとした愛嬌というものです。

そのせいで物騒な事件に巻き込まれたこともございますが、それも乙女の愛嬌ゆえのこと。私に非は一切ありません。

いえ、そもそも最初から私に非など、まったくなかったと言ってもよいのではないのでしょうか。

——あれは二ヶ月前のこと。

ヴァンディミオン公爵家の一人娘である私は、婚約者だったパリスタン王国第二王子のカイル様に、舞踏会で婚約破棄を言い渡されました。

そればかりか彼は、男爵令嬢テレネツアさんと結婚すると、その場で宣言なさったのです。

バカで自己中心的なカイル様に、幼い頃から散々嫌がらせを受けてきた私。この宣言がきっかけで、長年溜め込んできた鬱憤をとうとう爆発させることになりました。

テレネツアさんとカイル様はもちろん、その場にいた第二王子派の貴族達の顔面を片っ端から殴り飛ばし、舞踏会を血に染めたのです。

どうしてそんなことが貴族の令嬢である私にできたのか、ですって？

それはこの世界に加護と呼ばれる神様の奇跡が存在し、私はその力を使うことができるからです。我が国パリスタン王国のあるロマンシア大陸では、人々は必ず、数多い神様の誰かに祝福され

て生まれてきます。

普通は自分がどの神様から祝福されたのか気づくことはありません。けれどごく稀に、授かった祝福を自覚し、神々の力を発現できる者がいるのです。

その力は、加護と呼ばれています。

加護の力は、祝福を授けてくださった神様によって様々です。

私は時を司る神クロノワ様から祝福を受けているため、時間を加速させたり停滞させたりすることができません。

また、時空神クロノワ様の加護はとても稀少なので、私はパリスタン王家の保護を受けています。そのため、私が数多の貴族を殴り飛ばした『舞踏会血の海事件』のあとも、一切お咎めがありませんでした。

「……失礼する」

あの舞踏会のことを思い出していた私の耳に、澄んだボーイソプラノが聞こえてきて、書斎のドアが開けられました。

入ってきたのは、執事姿の黒髪の少年。彼はティーポットを載せた台車を押しながら、こちらに向かつて歩いてきます。

「……おかわり、そろそろいる頃かなと思って」

「ああ、ちようどいい頃合いだった。ありがとう、ナナカ」

お兄様が劣い言葉かけると、無表情のまま少年がこくりとうなずきます。

黒髪で琥珀色の瞳を持つ彼は、獣人族のナナカ。

彼との出会いもまた、なかなか衝撃的なものでした。

期せずして撲殺パーティーになってしまった舞踏会のあと、ナナカは私の命を狙う暗殺者として、目の前に現れたのです。

ですが、それは彼の意味によるものではありませんでした。

彼は悪徳貴族の奴隷だったのです。

ナナカの胸元には、絶対服従を強制する奴隷の証——奴隷紋が刻まれていました。

それゆえに、ナナカは自分の意思とは無関係に、無理矢理働かされていたというわけです。

事情を知った私は、加護の力を使ってナナカの奴隷紋を消してあげるかわりに、私を暗殺しようとした人物を教えると取引を持ちかけました。

そうして得た情報をもとに首謀者を追い詰め、見事ブン殴って事件は解決。そのあとお兄様が「我が家の執事として働かないか」と彼をスカウトし、いまにいたるところにいます。

もともと真面目で几帳面な性格のうえ、手先も器用なナナカは、あつという間に執事の仕事を覚えて、いまやお兄様やお父様に重宝されています。

無愛想な言葉遣いは相変わらずですけどね。うふふ。

「そうだ。ナナカ、お前からも言ってやってくれ」

「……なんの話だ？」

「我が愚妹スカーレットがなにかを企んでいるようなのだが、温泉旅行に行くなどとデタラメを言って誤魔化そうとするのだ」

「……また？」

ナナカが呆れたような目で私を見つめてきます。

またとはなんですか、またとは。

私が嘘偽りを申したことなど、一度や二度くらいしかありません。

「レオお兄様は過保護がすぎるんですわ。ねえナナカ、貴方からも言ってくださらない？『スカレットは裏表のないお淑やかな淑女なのだから、謀などするはずがない』って。ね？」

清らかな笑みを浮かべながら、ナナカに語りかけます。

するとナナカは、私とお兄様の間で視線を行き来させてから、ふいにお兄様のほうへ歩み寄りました。そして、私に向き直ってこう言ったのです。

「……正直に言ったほうがいい。どうせすぐバレるんだから」

自分の主張が支持されて、お兄様がうむうむとうなずきます。

ナナカの裏切り者。もう今日はよしよししてあげませんからね。

「そう恨めしそうな顔をするな。ナナカとて、お前を心配して言っているのだぞ？」

お兄様の言葉に同意するように、ナナカがうなずいています。

「……スカレットは、放っておくとなにをするかわからない。ゴドウィン事件の時だって、僕がついていくと言わなかったら、多分一人で乗り込んでいたし」

その名前を聞いた瞬間、彼のお肉を叩いた感触を思い出して、私の拳がうずうずと震えました。

ゴドウィン・ベネ・カーマイン様——我が国の元宰相であり、ナナカを仕向けて私を暗殺しようとした張本人です。

私が舞踏会で殴った貴族の中にどうやら彼の息子がいたらしく、その復讐を果たすべくナナカに暗殺を命じたのだとか。親バカにもほどがありますね。

さらにこのゴドウィン様、法で禁止された奴隷売買に手を出したり、汚職をもみ消したりと、悪逆の限りを尽くしていたのです。私が公衆の面前で婚約破棄されたのも、この方が裏で糸を引いていたせいでした。

世のため人のため、こんな所業を見過ごすわけにはまいりません。

そうして私は、鬱憤を晴らすのにちょうどいいサンドバッグ——ではなく、パリスタン王国にはびこる巨悪の権化を打ち倒すと決意したのでした。

「まったく、私の傍にはただでさえ手に負えないお方がいるというのに……お前にまで好き勝手に動かれては身が持たん」

「まあお兄様、心外ですわ。私はあの腹黒い金髪のお方のように、まわりくどい真似などいたしません。やるならば正々堂々、まっすぐ顔面に、ですわ」

「そもそもやるなど言って——っ！ うっ、胃痛が……ナナカ、胃薬をくれ」

顔を歪めてお腹を押さえるお兄様。そんな彼に胃薬を手渡しながら、ナナカが小首を傾げました。

「……ところで、なぜさっきから二人とも、あの人の名前を伏せているんだ？ 腹黒い金髪のお方って、第一王子のジュリア……むぐ」

しーっ、とナナカの唇に人差し指を当てて、お口をチャックさせます。

「めっ、ですわよ、ナナカ。聞いたことがあるでしょう、夜中に口笛を吹くと悪魔がやってくるという言い伝えを。あのお方もそれと同様です」

うかつに名前を口走ろうものなら、どこからか聞きつけて「私の陰口で盛り上がっているうつけ

者がいるらしいな？」などと言いながら現れかねません。

「あのお方は地獄耳なのです。なにもしくとも勝手に現れるというのに、名前など口にしては、召喚魔法で呼び寄せるようなものですよ。二人で家を抜け出した時のことを忘れましたか？」

あれは、いざゴドウィン様を成敗せんと王都に向かおうとした時。家を出た私とナナカの前に、あのお方は待っていましたとばかりに現れました。

名前を呼んではいけない金髪のお方——そう、パリスタン王国第一王子ジュリアス・フォン・パリスタン様です。

ジュリアス様は、私達がゴドウィン様をブン殴ろうとしていることを知り、「面白そうだから自分も一枚噛ませろ」と言い出しました。

「……でも、ジュリアスがいなかったら、あんなに早くゴドウィンに辿り着くことはできなかった。だから、そんなに目の敵にしたら可哀相……って、頭を撫でるな」

首を傾げながらブツブツと話すナナカが可愛かったので、とりあえず頭を撫でておきます。そう。業腹なことですが、ジュリアス様はとても優秀でいらつしやいました。

ゴドウィン様が主催していた奴隷オークションの情報をあつさりと手に入れたり、警備隊を指揮して彼を追いつめたり——もしジュリアス様の協力がなければ、ゴドウィン様をブン殴るところか、相見えることすらできなかったかもしれない。

本来であれば感謝すべきで、憎まれ口を叩くなどもつてのほか。けれどあのお方は、私を散々からかった挙げ句、「貴女は最愛の玩具だ」などと言って乙女の気持ちを弄んだのです。それを考え

れば、この程度の扱いで十分でしょう。

「どうしたスカーレット、突然黙り込んで。それに少し顔が赤くなっているようだが、風邪でも引いたのか？」

「……なんでもありませんわ。久しぶりに動いたので、ちよつと体温が上がっただけです」

心配そうにこちらを見るお兄様に、大丈夫だと言うように微笑みを向けました。

体調が万全でないのは事実ですので、嘘は言っておりません。

なにしろゴドウィン様を成敗するために潜入した奴隷オークションの会場では、悪徳貴族のみならず邪魔をする兵士やらを、加護の力全開でブン殴りましたからね。

流石の私も体力、精神力ともに尽き果てて、それから一ヶ月は部屋から出ることもできませんでした。あれから二ヶ月経ったいまでも、完全に回復しているとは言いません。

たくさんのお肉を殴ってストレス発散できたので、私としては大満足でしたが。

「お兄様のほうこそ、体調はいかがですか？ このところ本当にお忙しくされていたではありませんか」

奴隷オークションで悪徳貴族達が一斉に捕らえられた結果、パリスタン王国では大規模な人事革命が起こりました。

国王陛下とジュリアス様は、身分や性別にかかわらず、有能で勤勉な方々を積極的に要職に起用。そのせいでジュリアス様の部下であるお兄様は、一ヶ月にも及ぶ連続勤務を余儀なくされていました。

レオお兄様は先日やっと休暇に入り、生ける屍しかばねのようなお顔でヴァンデイミオン公爵領にある本邸へ帰ってきたところです。

「ああ、おいたわしいレオお兄様。どこぞの腹黒い王子様に馬車馬のごとく働かされたせいで、最愛の妹を信じる気持ちを忘れてしまったのですね」

「私が忙しく働くはめになったのには、お前にも責任の一端があるということを、当然認識しているのだろうな、愚妹ぐまいよ」

そう言うて私を睨にらむお兄様を笑顔で誤魔化ごまかしつつ、彼の座る机に歩み寄ります。

雑談はさておき、そろそろ本題に入りましょう。

「ご覧下さい、レオお兄様」

私は自らの銀髪を一房手にとつて、その中の黒く染まっている部分をお兄様の目の前に差し出しました。

「消耗した加護の力はほとんど回復しましたが、この部分だけどうしても銀髪に戻らないのです。せつかくお兄様に綺麗きれだと言っていたいだいた髪ですのに。私、申し訳なくて……」

加護の力は強力であるが故に、デメリットも存在します。

それは力の種類や祝福を授けてくれた神様によって様々ですが、私の場合、使いすぎると身体機能が低下したり、このように髪の色が変わってしまったたりすることがありました。

大抵は時間が経てば回復するものの、奴隸どれいオークションの一件から二ヶ月経っても、一部の髪が黒く染まったまま戻っておりません。

思えばあの舞踏会から奴隸どれいオークションにいたるまで、通常より加護を多用したにもかかわらず、まともに休む暇がありませんでした。髪の色に戻るまで時間がかかっているのは、きっとそのためでしょう。

「私に気を使う必要などない……だが、確かにこれは心配だな」

私の黒髪交じりの銀髪を手に取り、お兄様が目を伏せます。そして思案するかのように顎あごに手を当てながら言いました。

「……それで、湯治ゆじに行きたいということか」

「その通りでございます。以前、我が家に遊びに来てくださった友人に相談をしたところ、霊験れいげんあらたかな温泉宿をいくつか紹介していただきまして……」

私は地図を広げ、国の東西南北に位置する温泉の場所を指し示しながら、ルートを説明します。すると、お兄様はなにかに思い至いたつたらしく、探るような視線を私に向けて口を開きました。

「……そういえばお前は、いつもこの時季になると、決まってどこかへ旅行に行きたがるな」

「そうでしたかしら。レオお兄様の気のせいでは？」

「間違いない。私は一度記憶したことは絶対に忘れないからな」

とぼける私に、疑惑に満ちたお兄様の視線が突き刺さります。

とりあえず、それらしいことを言つて誤魔化ごまかしてみましようか。

勘の鋭いお兄様に通用するとはとても思えません……

「仕方ありませんね。白状いたします。実は――」

「もしや、聖女様を殴る機会をうかがっているわけではなからうな？」

「……はい？」

お兄様がなにやらとんでもないことをおっしゃいました。

こんな言いがかりをつけられたら、本来は即座に否定したいところです。

しかしとりあえずはお兄様の言い分を聞いてみるとしましょうか。

「昔からお前はなにかと理由をつけては、傲慢な貴族や悪人を殴りたがるだろう？」

「世のため人のため、ですわ」

「聖女様を信仰している『ディアナ聖教』も、国やその他各所に多額の寄付を要求しているからなお前の言う世のため人のために殴られる対象となっても、おかしくはないだろう？」

「……なるほど。一理ありますわね」

パリスタン王国には、ふたつの大きな宗教組織が存在します。

ひとつはここ数年の間に国の権力者たちを中心に信者を増やし、国教に認定されるまでにいたったパルミア教。

そしてもうひとつが、パリスタン王国建国当初から存在するディアナ聖教です。

パルミア教は女神パルミア様を信仰しているのに対し、ディアナ聖教は魔を祓う力を持った聖女ディアナ様を信仰の対象としています。

どちらの宗教が国教と呼ぶにふさわしいかと問われれば、ディアナ聖教だと私は答えるでしょう。パルミア教は現在国教とされているものの、成金商人をトップにすえた、厳かな雰囲気（おこげ）の欠片も

ない宗教です。それよりも、古来よりこの地に根づいていて、民衆の支持も厚いディアナ聖教のほうがはるかに信頼できますからね。

ですが、ディアナ聖教とて完全に真つ白と言えるわけではありません。

ディアナ聖教は神ではなく人間を信仰しているうえ、先ほどお兄様が言った通り、多額の寄付金を国から受け取っているのです。

そのお金は、ディアナ聖教が国防にとつて大事な役割を担っているからこそ提供されているものですが、民衆はその事実を知らされていないため、昨今ではディアナ聖教のあり方に疑問を持つ人も増えており、パルミア教に改宗する方も少なくないとか。

もし私がディアナ聖教と国防の関係を詳しく知らなかったなら、彼らが宗教を利用してお金を騙し取っていると考えてもおかしくはないでしょう。

ですが……たとえ聖女様が私の拳（こぶし）を叩きつきたいような悪いお方だったとしても、それは絶対に不可能なのです、お兄様。

「毎年この時季に行われること——それは『聖地巡礼』だろう。もし私の心配が当たっていて、お前が『聖地巡礼』を機に聖女様を殴ろうなどと考えているのなら、絶対にやめておけ。あのお方の……聖女ディアナ様のお力は本物だ。実際にこの目で見た私が保証しよう」

お兄様の言う『聖地巡礼』とは、一年に一度、ディアナ聖教主導で行われている行事のことですね。その内容は文字通り、聖女様を連れた一行が、東西南北それぞれの国境沿いにある聖地を巡り、とある儀式を行うというものです。

お兄様は去年、巡礼の一行に同行し、そこで直に儀式をご覧になりました。

「お兄様がそうおっしゃるのであれば、疑う余地はありませんね」

あつさり肯定する私に、お兄様は眉間に皺を寄せて疑わしげな表情を浮かべます。

『悪徳宰相飛翔事件』以来、いままでも増して疑り深くなっていらいっしやいますね。

大方、なんの躊躇もなく宰相様を殴った私であれば、聖女様であっても容赦なく殴るだろうと思っているのでしょうか。

流石ですわ、お兄様。とてもよく私のことを理解なさっておいです。ですがいまのところ、私が聖女様を殴る予定はございません。

「レオお兄様。聖女様は国民から愛され、国からも必要とされているお方です。表でも嫌われ、裏の顔も真つ黒だった宰相様とはまるで違います。そのようなお方を無闇に殴ろうなどは、流石の私も考えておりませんよ。ご安心くださいませ」

落ち着いた調子で話す私に、お兄様はまだ訝しげな表情を向けています。

「それに私は本当に温泉旅行に出かけただけですよ。いつもこの時季に……とおっしゃいます、今はちょうど休暇の時季。それが聖地巡礼のタイミングと同じなのですから、お出かけしたくなる時季といつも重なってしまうだけですわ」

「……この件に関してなにとつ、嘘偽りもやましいこともないと私に誓えるか？」

「誓いましょう」

しばし見つめ合ったあと、お兄様は深いため息をつかれます。

そして身体の力を抜いて椅子に深く腰掛けると、険のとれた穏やかな声で言いました。

「……わかった。温泉旅行を認めよう。だが、くれぐれも問題は起こさないよ——」

「ありがとうございます。では、早速出発するといたしますわ」

「……は？」

お兄様が啞然とした顔で、素つ頓狂な声を上げられます。

私はスカートを摘まんで優雅に一礼すると、微笑んで別れの言葉を口にしました。

「それではご機嫌よう、レオお兄様、ナナカ」

「ま、待て！ 出発するって、いまずぐに行く気か!？」

「……だいたいこうなることは読めていた。いつてらっしゃい」

慌てて席から立ち上がろうとするお兄様と、諦めた顔で手を振るナナカ。そんな彼らに背を向けて、駆け足で書斎から廊下に出ます。

そのまま一足飛びに階段を駆け下りた私は、玄関から外へと飛び出しました。

本邸の中は大騒ぎになっていることでしょう。

しかし、いまの私はお兄様から外出の許可をいただいた自由の身。

何人たりとも止めることは敵いません。

だって奴隷オークションの一件以降、ほとんど家から出してもらえなかったんですもの。少しくらい羽目を外しても、バチは当たらないでしょう？

と、そんな解放的な気分で本邸の正門をくぐり、我が家の敷地を出ますと――

そこには王家の紋章が刻まれた豪奢な馬車が一台、待ち伏せするかのように停車しておりました。どうやら私の自由な時間はここまでのようです。

「すいぶんと遅かったな」

馬車の陰から出てきた金髪の殿方が、私の顔を見るなり憎まれ口を叩きます。遅かったな、ではありません。

貴方とは王都で落ち合う予定だったはず。なのになぜわざわざここまで来たのでしょうかね、このお方は。

予想するにお兄様から逃げてくる私を見たかったとか、そんな意地悪な理由でしょうけど。

まったく、相変わらずの腹黒っぷりでございますね——ジュリアス様は。

このたび旅行へ行きたいと言いつ出した本当の理由。それは、私が聖地巡礼に向かう一行のメンバーだからでした。

ジュリアス様は王族の代表として、今回の聖地巡礼を見届けるお立場でいらっしゃいます。そして実は私も、ディアナ聖教とは深い関わりがあり、巡礼に参加しなければならない立場。物心ついた頃より毎年巡礼の一行に同行しております。

けれど私が同行することは、聖地巡礼の関係者以外には明かせない秘密。

そのため、今年は領地でお留守番のお兄様には、温泉旅行に行くと伝えたのでした。

まあ、巡礼で訪れる先に靈験あらたかな温泉があるのは本当ですし、ついでに湯治もしたいと思っていますので、嘘はついておりませんよ。



「淑女^{レディ}を待つのは殿方の務めでしょう？ 大人しく王都で待つこともできないのですか？」

挑発的に微笑む私に、ジュリアス様はとびっきりの黒い笑みを浮かべて言いました。

「くくつ。貴女が淑女^{しゅくしよ}としての扱いを期待するような人だったとはな。面白い冗談だ」

「それでも私、公爵家の令嬢なのですから。まったく、相変わらず口の減らないお方ですね」

「いい加減慣れろ。それが私の素^すだ」

もう慣れましたし、疑いようありませんわ。貴方が腹黒王子だという事実はね。

「ちなみに今年は、どんな嘘をついてレオの追及を逃れてきたのだ？」

「人間きが悪いですね。私は嘘などついておりません。事実の通り、温泉旅行に行くと言って、ちゃんと許可をもらってききましたもの」

私の答えを聞いて、ジュリアス様がフツと鼻で笑います。

「確かに嘘ではないが、ものはいきようだな。真実を知ったレオがあとでどんな顔をするのか、いまから楽しみで仕方がないぞ。ククツ」

はい、出ました。これがこのお方の本性でございます。

人の苦悩する顔や、うろたえる顔を見るのがなによりも大好きという、サディスト腹黒王子。たまに甘い言葉をささやかれたとしても、決して騙^{だま}されてはいけませんよ。私も改めて肝^{きも}に銘^{めい}じておきましょう。

「さて、立ち話はこれくらいにして、そろそろ王都へ出発するのでしょうか。私と一緒にいるところをレオに見られても面倒だろう？」

そもそも立ち話を始めたのは一体どなただったかしら？

と、無駄な応酬を重ねても疲れるだけです。心の広い私は、ジュリアス様に「はいはいそうですね」と同意してあげます。

上手く殿方を立てるのも、淑女^{しゅくしよ}の役目ですからね。

「レディ、お手をどうぞ」

そう言っ、ジュリアス様が芝居がかった仕草で手を差し出します。その手を取り、私は完璧かつ優雅な所作で馬車に乗り込みました。

さあ、まいりましょうか。

温泉旅行ならぬ、聖地巡礼の出発地点——王都グランヒルデへ。

第二章 死ぬほど痛いだけですわ。

グランヒルデへ向かう道中では、山賊の襲撃などがないかと期待していた私。ですが、そういったトラブルはなく、平和そのものといった感じで退屈にもほどがあります。

それはジュリアス様も同様だったらしく、馬車での旅も三日目に差し掛かった時、「退屈のきになにか話せ」と要求してきました。

上から目線の発言に、何様？ と思いましたが、暇を持て余していたのは事実だったので、仕方なしに二人で雑談をすることに。

温泉旅行に行きたいと言った私を、なぜお兄様が引き留めようとしたのかお話しして差し上げました。

「くつくつく……！」

馬車内にジュリアス様の含み笑いが響きます。

一体なにがこの方の笑いのツボを刺激したのでしょうか。

「では、レオは貴女が毎年この時季に出かけたがる理由を、聖地巡礼の隙について聖女を殴るためだと思っていたというわけか」

「あの話しぶりから察するに、そうなのではないでしょうか」

「ダメだ、こらえきれん……！ はははっ！」

お腹を抱えて笑うジュリアス様。

そのまま笑いが止まらなくなつて、笑い死にされればよろしいのに。

「いやいや、流石は私の片腕だな。鋭い考察をしているではないか。半分正解といってもいいくらいだぞ、その解答は」

ジュリアス様の言葉には、大いに語弊があることをここに明言しておきます。

当たっているのは聖地巡礼の一行と行動をともにしようとしている、ということだけですからね。「そこまで疑われているのならば、聖地巡礼に貴女が同行するということにも勘づかれているだろう」

本邸を出る前にお兄様に見せた温泉旅行の道筋は、聖地巡礼のルートとほぼ同じものです。言わずもがな、気づかれていますことでしょう。

お兄様が深く追及しないでくださったのは、なんだかんだ言って私が間違ったことはしないと信用してくれているからでしょうね。

お優しいですよ、お兄様は。どこぞの腹黒王子様と違って。

「去年はローブで全身を覆って巡礼の旅を終えたようだが、もし今年もレオが参加していたらどうやって誤魔化すつもりだったのだ？ いや、待て。言わなくていい。それは次の楽しみに取っておくでしょう。くくっ」

「……許可が出ていないので、一応レオお兄様には伏せておきましたが……いまやお兄様も王宮秘

密調査室の室長という公的な身分を授かっております。私が巡礼の一行に同行している理由を秘匿する必要は、もはやないのでは？」

王宮秘密調査室とは、国王陛下とジュリアス様が立ち上げられた諜報組織で、主に王宮内部の汚職や不正を取り締まることを目的としています。

以前は議会の承認を得ていない秘密組織として活動していましたが、悪徳上位貴族の肅正をきっかけに、正式な王宮の機関として始動しました。

その室長を務めるレオお兄様は、国の機密を知るに足る地位にあると思うのですが……

「いや、隠す必要がある」

「……？ どうしてですか？」

首を傾げる私に、ジュリアス様は髪をかきあげながらドヤ顔で言いました。

「ギリギリまで黙っておいたほうが、レオの反応が面白くなるからに決まっているだろう」

ブン殴っていいですか、このお方。

「冗談はさておきだ。ゴドウィン的一件以来、どうも周辺諸国の動きがきな臭くなっている。悪徳貴族どもは一掃したが、そのせいで王宮内部はまだ混乱したままだ。これを機に隣国がなにかを仕掛けようとしてきても不思議ではない。どこに諜報員が紛れ込んでいるかわからんな。気をつけるに越したことはないだろう」

ゴドウィン様を捕らえることに成功したものの、彼は獄中で自殺。協力していたと思われる他国の組織など、その背後関係はまったくわからないままになってしまったのでした。

残念ながら、今後またなにかが起きてもおかしくありません。

「よって、たとえレオであつても情報は伏せておくように。わかったな？」

お兄様の名前をことさらに強調する辺り、絶対に面白がつているでしょう。まったく、どうしようもない方ですね。真面目に聖地巡礼に取り組もうとしている私を、少しは見習ってほしいのです。

まあ、どのみち聖地巡礼が終わるまでは、お兄様とお会いすることもないでしょうから、今はお望み通り口をつぐみましょう。

って、なにを勝手に私の頭に触れているのですか。

私の頭を撫でているジュリアス様に、思いきり不満を込めた視線をプレゼントしてあげます。

ちよつと気を抜くと、すぐこういうことをしてきましたからね、この方は。油断も隙もあつたものではありません。

「ほら、私ばかりに熱い視線を向けていないで、外を見てみる。目的地はすぐそこだぞ」

頭を撫で続けるジュリアス様の手をペチペチとはたきながら、言われるがままに視線を窓の外に向けます。

レンガ造りの家や店が立ち並ぶ、王都の中央通り。

そこから東に目を向けると、見上げるほど高い純白の壁がそびえ立っていました。

——聖教区。

聖地巡礼の出発地点であり、**「不浄の壁」**で囲われた特別街区ですね。

「神々しい、と言いたいところですが……仰々しいと言ったほうがふさわしいですね、あの壁は。」

威圧感しか覚えませんし」

「不浄の壁」には、城がひとつ建つほどの国費が投入されているからな。聖教区を俗世の穢れから守るために必要だったという話だが、説得力もなにもあったものではない。これを建てるだけの金があれば、一体どれほどの政策を実現できたことか。まったく、見るたびに頭が痛くなるわ」

白い壁で囲われた聖教区内にあるのは、パルミア教とディアナ聖教それぞれの総本部です。その周辺には大小様々な家が建ち並び、各教団関係者の方々が暮らしています。

もともとこの地域に住んでいたのは、ディアナ聖教の方々だけだったため、聖教区は小さな一街区でしかありませんでした。

そこにパルミア教が参入し、いまは貴族街に匹敵するほどの総面積を誇っています。パルミア教の勢力拡大を象徴するかのように「不浄の壁」が建てられたことから、その隆盛をうかがい知ることができそうです。

聖教区を目指してやってきた私達にとって、本来ならあの壁が見えたことは喜ばしいことです。ですがなんと言いますか……壁の内側から滲み出てくる悪意を感じ取ってしまった、素直に喜べないのですよね。

「俗世の穢れを遮るための壁、ですか。まるでまっとうな聖職者のような言いようですね。それを主張した教皇様の腹のうちは、あの壁の色とは正反対に真っ黒だというのに」

パルミア教の教皇サルゴン様といえば、商売としての宗教に目をつけて成り上がった人物。いまでこそそれなりに信者を抱えて敬われているようですが、昔はかなり悪どい商売をしていた

らしく、当時を知る商業区の方々からは「成金クソたぬき」のふたつ名で呼ばれているのだとか。そういった噂で人を判断するのはどうかと思いつつも、サルゴン様に関してはその限りではありません。

だってサルゴン様は、清貧に身を置くべき聖職者であるにもかかわらず、でっぷりと太って脂ぎった顔をしているのですよ？ そのうえ、いかにも高級そうな宝飾品をジャラジャラと身につけているのです。

私が殴ってきた悪徳貴族の方々の特徴と、完全に一致するではありませんか。

これを黒と言わず、誰を黒だと言うのでしょうか。

「実際には、その腹のうちの黒さを隠すための壁なのだろうよ。そんな下らないことのために国庫を開かされるこちらはたまったものではないがな」

吐き捨てるように言って舌打ちをするジュリアス様。

「パルミア教を国教まで押し上げたのは、確かゴドウィン様でしたね。宰相様がバックについていたのであれば、国庫を開かせるのも容易ということですか」

私利私欲を満たすために悪事を働いている者同士、利害が一致したのでしょうか。

ゴドウィン様とサルゴン様が協力関係にあったのは、王宮内ではもはや公然の秘密となっていました。

それを証明する最たる例が、パルミア教を国教に認定させるために、ゴドウィン様が様々な手を使って尽力したことです。

資金を援助したり、自分の派閥に属している上位貴族達に働きかけて優遇措置をとったり。結果、王国議会で過半数の賛成を得て、パルミア教は国教に認定されました。

一度議会を通ってしまった以上、ゴドウィン様がなくなってもその決定が覆ることはありません。国内の膿を出し切りたい国王陛下とジュリアス様にとっては、目の上のたんこぶになっているのが実情です。

こんなことになるのであれば、先にディアナ聖教を国教にしておけばよかったのに、とも思いますが。ですが、パリスタン王家はディアナ聖教を国教と定めることにずっと難色を示していました。ディアナ聖教は、古くからパリスタン王国の国防において非常に重要な役割を担っており、ある意味軍よりも頼りにされている立場にあるため、王家はずっと、国教化して発言権を大きくするのは危険だと主張していました。

確かに国教に認定されれば、王家に匹敵するほどの権力を持ちかねません。そうなれば王家と議会による統治は揺らぎ、国が乱れる可能性があります。

そういった背景から、ディアナ聖教は国教に認定されることなく、パリスタン王国に数多ある宗教のひとつとして存在してきたわけです。

まあ昔ならともかく、いまは聖女の力を信じている人も減っており、本当に国防において欠けない存在だと知っている人はかなり少数になっています。

その隙を、悪辣なパルミア教にまんまと突かれてしまったのですが。

いまやパルミア教の教皇の権力たるや、国王陛下と肩を並べるほどです。

「止まれ、止まれ！」

その時、不意に外から男性の大きな声が聞こえてきました。

それと同時に馬車が急停車して、ぐらりと大きく車内が揺れます。

「……あら」

体勢を崩して少しだけ前のめりになった私の身体を、正面に座っていたジュリアス様が抱きとめてくださいました。

こういう時はしっかり紳士然とした振る舞いをするところがまた、憎たらしいのですよね、このお方は。

「大丈夫か？」

「はい。お手数おかけしました。ありがとうございます」

「どうした？ やけに素直だな。頭は打っていないはずだが……」

真顔でのたまうジュリアス様の腹に、心の中でパンチをお見舞いします。

どうして貴方はそう、いつも余計な一言を付け加えるのでしょうか。

この方に感謝なんて、もう金輪際いたしません。

「ジュリアス様、スカーレット様、申し訳ございません！ お怪我はありませんか！」

御者が慌てた様子で馬車のドアを開けて、私達に頭を下げます。

手を振って「大事ない」と答えたジュリアス様は、御者を落ち着かせるように穏やかな声で続けて言いました。

「それで、一体なにが起こっている？」

「そ、それが……あれをご覧いただけますか？」

御者に促されるまま、ジュリアス様と馬車の外に出ます。

目の前には聖教区唯一の入り口である、聖門が立ちはだかつていました。

この門は、日中は常に開かれているはずなのですが、なぜかいまは固く閉ざされているよう。

これは一体どういうことでしょう。

「門兵！ なぜ聖門を閉ざしている！」

ジュリアス様が、門の上の見張り台に立っている兵士に向かって叫びます。

兵士は叫んでいる相手が誰なのか気つくと、困った様子で敬礼しました。

「はっ、ジュリアス殿下！ 我々は教皇サルゴン様より、国王陛下の指示がない限りは誰も通すなと厳命を受けております！」

門兵の答えにジュリアス様は顔をしかめました。

聖教区を囲む「不浄の壁」やこの聖門は、パルミア教の管轄下にあります。つまりここにいる門兵は、パルミア教の僧兵ですね。

ジュリアス様は面倒臭そうに彼らを睨みつつ、再び声を張り上げます。

「そんな報告は受けていない！ それに今日は王宮から使者が行くと、聖教区全体に正式に通達されているはずだ。それを知っていて門を閉鎖するなどありえんぞ！」

「う、承（うけたまわ）っております！ 申し訳（わけ）ございませんがお引き取りください！」

なにやら雲行きが怪しいですね。

「ちっ、サルゴンのためきジジイめ。やってくれる」

「国王陛下に指示をいただければよろしいのでは？」

「無理だ。父上はいま、大陸諸国との会議に出ているため、一ヶ月は戻って来られない。それを知っていてわざと嫌がらせをしてきたのだらう」

あら。それはまた、都合の悪いタイミングでしたわね。

彼らにとつては、好都合なのでしようけれど、妨害されるこちらはたまったものではありません。「聖地巡礼の妨害をするのが目的に違いない。稚拙（ちせつ）で子供じみた嫌がらせだ」

「殿下！ 我らが教皇猊下（ぎげいか）を貶めるようなことをおっしゃるのはやめていただきますよう！」

ジュリアス様の挑発（てんぱつ）に応（こた）えるように、門の上からヒステリックな声が響き渡ってきます。

見上げると、パルミア教の僧服を着た肥満体型の殿方が、兵を押しつけて姿を現しました。

「早速親玉がお出ましか。こうもあつさり釣られるとは面白くないやつらだ。そうは思わんか、スカーレット」

つまらなそうに同意を求めてくるジュリアス様には申し訳ないのですが、私はいまそこそこではありません。

節制という言葉とはかけ離れた、見るからにだらしないあの体型。

高慢な口ぶりと人を見下すことに慣れきった目つき。

あちこちに高価な宝飾品を身につけたその出で立ち（いでたち）は、まさしく私の大好物である悪人（わるにん）そのもの

でございます。

ああ、できることならばいますぐに見張り台に上がっていつて、この拳をあの肥え太ったお身体に叩き込みたい。

でも、果たしてあのお方は、本当に私が殴るに値するような悪人なのでしょうか。

「わかりきってはいるが、一応聞いておこうか。貴公、何者だ？」

ジュリアス様の問いに、僧服を着たお方が誇らしげに名乗りました。

「私の名前はジャルモウ。恐れ多くもパルミア教の異端審問官を務めさせていただいている者です。以後お見知りおきを、ジュリアス殿下」

ジャルモウと名乗った男の言葉に、ジュリアス様が顔をしかめて問い返します。

「異端審問官だ？　いつそのような役職を作ることが許された？　我が国は信仰の自由を保証している。いくらパルミア教が国教であっても、他の信仰を排除することなど断じて許されるものではない」

「偉大なる我が女神、パルミア様が許されました。よって異端者はすべからく排斥します。これを行うは我々の宿命。何人たりとも妨げることは許されません。たとえ相手が殿下だったとしてもです」

これはまた……とんでもないことをおっしゃいますね。

ここまで行きすぎた思想の教徒がいるなんて、流石に聞いたことがあります。俗に言う狂信者というやつなのでしょう。

「たとえ貴公らの神が許したとしても、我が国を統治しているのは国王陛下であり、国政に関わる決定は王国議会でなされるものだ」

フン、と鼻を鳴らしながら、ジュリアス様が吐き捨てるように告げました。

「しかるべき手順を踏んでいない以上、貴公らがどんな大義名分を掲げようと、その行為は看過できるものではない。覚悟はできているのだろうか？」

「どうぞご自由に。ですが、私達に手を出してみなさい。教皇陛下の不興を買って、痛い目を見るでしょうね」

「ほう。貴公らが裁かれた場合、私が教皇の不興を買うのか。では異端審問官などというふざけた組織は、教皇の認可を得ているものだと考えていいのだな？」

ジュリアス様がそう問い詰めると、ジャルモウさんは大きく目を見開き、こちらを指さして大声で叫びました。

「なにを当たり前のことを！　我ら異端審問官は異端者どもをなぶり殺しにするため、聖なる鉄槌を託されている。いわば偉大なる女神の使徒なのだ！　教皇陛下が最も信頼を置いていると言っても過言ではない、選ばれし者。それが私達である！」

そう言ってジャルモウさんは背中に手を伸ばし、僧服の中から先端に鉄球がついた棍棒のようなものを取り出します。

確かあれは、モーニングスターという武器だったかしら。

魔を祓う聖職者が、悪魔と対峙する時にあいつた武器を使うことがあると聞いたことがあり

ます。

これは面白くなってまいりました。

「ご覧あれ！　これぞ異端者を処刑するために女神パルミア様から託された魔道具、^{いか}神なる雷槌^{かづち}！　これで彼奴^{やつ}らの信仰ごと頭を叩き割り、神罰を下してくれる！」

先端についた鉄球を振り回しながら、血走った目でこちらを睨みつけてくるジャルモウさん。悪人っぽいのは見た目だけだったかどうかと思っていました。

はい、人格も申し分ありませんね。彼の発する一言一句が耳に入るたびに、このお方が我が国に存在してはならない邪悪な存在だということが伝わってまいります。

ゴドウィン様以来でしょうか、これ程のお肉と巡り会えたのは。正直そられます。

「よし、言質^{げんち}は取った。あとは好きにしていぞ」

満足そうなお顔でジュリアス様が言い、私のうしろに下がりました。

いつの間にかその手には、音声^{おんせい}を記録する魔道具が握られております。

どうやらジャルモウさんの発言を記録していたようです。これを使って、パルミア教に責任を追及するつもりなのでしょう。

なんという抜け目のなさ。流石^{さすが}は腹黒王子ですわね。

「それを使えばパルミア教の教皇様を処罰することはできそうですか？」

「ないよりはマシ程度だろうな。問い詰めたところで知らぬ存ぜぬを決め込むだろうし、精々が下っ端の尻尾を切っておしまいだろうよ。面倒なことだ」

「それはそれは。残念でございますね」

「嬉しそうに言われても慰め^{なぐさ}られた気にすらならん。ほら、さっさとやってしまってくれ。会合の時間も迫っているのだ。時間は有限なのだから、無駄にするなどもつてのほかだぞ」

せつがちですわね、もう。

ご馳走^{ちそう}を前にした期待感を、少しは楽しませてくださいまし。

「最後に確認いたしますが――本当によろしいのですね？　あれをブン殴っても」

「かまわん。相手は聖職者の皮を被った、犯罪者予備軍だ。派手にやれ」

安心いたしました。それでは思う存分、好き放題にやらせていただきます。

「おや？　誰かと思えば、貴女はスカーレット・エル・ヴァンディミオンではありませんか」

歩み出た私を見て、ジャルモウさんが鉄球を振り回す手を止めました。

「あら、私のことをご存じで？　光栄ですわね」

「ええ、知っております……知っておりますとも！」

見張り台から身を乗り出し、ジャルモウさんが目を見開いて叫びます。

「貴様こそ！　パルミア教の最も忌むべき怨敵！　我らが同志、大司教ゴドウィン様を卑劣^{ひれつ}な畏に
はめた邪悪^{じあく}の権化^{けんげ}！　ここで相見^{あいみ}えることが叶うとは、なんという僥倖^{えいそう}！　いますぐにその頭を叩
き割ってあげましょう！」

「……大司教、ゴドウィン様？」

頭に疑問符を浮かべながら振り返ると、ジュリアス様も肩をすくめてお手上げのポーズを取って

おります。

えっと、あの方はバルミア教ではそんな地位だったのですか？
というか、そもそも彼はバルミア教の教徒だったのですか？

信仰心の欠片もなさそうな方でしたが……なんだか意外な一面を知ってしまいました。
ですが、まあそれがどうしたというお話です。だって――

「ゴドウィン様とつながりがあったということは、殴る理由がひとつ増えましたわね」
行く手を阻む聖門に歩み寄った私は、手の平を門扉に這わせませす。

ジャルモウさんはメインディッシュ。彼のお相手をする前に、まずはこの門を開くところからはじめましょう。

高さ五メートル、幅はその倍はありそうな大きな木造の門には、内側から門が掛けられているようでした。これはとても人の力では開きそうにありませんね。

それにこの門、ただ門が掛けられているだけではないようです。

手の平から、聖教区を囲っている「不浄の壁」と同様の神聖な力を感じました。

「素晴らしいでしょう、その聖門は。女神バルミア様の使いによって、聖防御の結果が張られているのですよ。破城槌を使っても傷ひとつつけられず、魔法の類はすべて撥ね返されます。まさに神の奇跡と呼ぶにふさわしいでしょう。そうは思いませんか？」

決して壊れず、魔法も効かない門。これを外側から開ける手段はないと言っていいでしょうね。

まあ、私には関係ありませんが。

「神の奇跡だなんて、ただの門ひとつに随分と大げさなことをおっしゃいますのね」

目を閉じ、加護の力を手の平に集中させます。

確かに通常の人間の力では、この門を開けることはできないでしょう。

ですが、同じ神の奇跡をもつてすれば……

「――開きなさい」

ドゴーン！ と派手な音を立てて聖門が吹っ飛び、聖教区の奥へまっすぐ飛んでいきます。

それは門の向こう側に立っていたバルミア教の教会に激突すると、建物を崩落させながらバラバラに砕け散りました。

「扉なのですから、押して開ければいい――ただ、それだけのお話でしょう？」

何事かと見張り台から下りてきた門兵の方々が、破壊された門を見て顔を青くします。

なにをそのように焦っているのでしょうか。私はただ、閉じていた門を開いただけなのに。

「め、女神バルミアの加護厚き聖門が……」

「武器も使わず、素手で押し開いただと……？」

「ば、化け物……！」

門兵の方々の失礼なつぶやきを聞き流しつつ、ぶらぶらと手を振って手首の関節をほぐします。
久しぶりに力を使ったので、少し力みすぎたかしら。

まさかあんな遠くまで門が飛んでいくとは思いませんでした。

もしかして硬くて重そうなのは見かけだけで、本当は中に綿でも詰まっていたのかしら。

それとも、みなさまが門の開け方を間違っていたとか？

引いて開ける扉だと思っていたら押して開ける扉だった、などはよくあることですし。

ああ、きつとそうですわね。

だって、あれだけ大仰に聖門を讃え上げていたのに、実際は弱い乙女である私の細腕一本で粉砕できるなんて。普通に考えてありえませんか。

「みなさま、気づいていらっしゃらないようなので教えて差し上げましょう——この門は押して開けるのですよ」

「「知つとるわー！」」

盛大なツツコミを入れられてしまいました。解せません。

「貴女にしては気の利いたことをするな。ご苦労」

私のうしろで腕を組んで立っていたジュリアス様が上から目線でそう告げると、門扉のなくなった聖門を馬車が悠々と通過していきます。

ここから目的地まではまだ距離がありますから、馬車は必要です。都合よく利用された気がしないでもないですが、まあよしとしましょう。

ぶらぶらと手を振りながらジュリアス様のところまで戻ると、彼は怪訝そうな顔をなさいました。

「どうした？ いまでも手でも痛めたか？」

「まさか。戸を開くだけで手を痛める者などおりません」

「箱庭で蝶よ花よと育てられたご令嬢という生き物は、スプーンやフォークよりも重いものを持た

ぬと聞く。虚飾と業で塗り固められた扉を力任せに開けば、手ぐらい痛めてもおかしくはあるまい？」

しれつとそう告げるジュリアス様を、半目で睨みます。

なにが蝶よ花よ、ですか。幼少期の私が「狂犬姫」と呼ばれていたことを知っているくせに。

「ジュリアス様、わかつていて聞いていらつしやいますね？」

「くくつ。なんのことだ？」

……本当に意地の悪いお方！

まあ、悪者を殴る機会を与えてくれたということで、今回だけは許して差し上げますが。

ジュリアス様は不意に門の上を見上げ、口の端を吊り上げて悪い笑みを浮かべました。

「見ての通りだ。命が惜しい者は引き下がったほうが身のためだぞ？ なにせこのご令嬢は、諸君

らも知るあの「救国の鉄拳姫」なのだからな」

ジュリアス様の言葉に、門兵の方々が目を見開きます。

「せ、鮮血姫スカーレット・エル・ヴァンデイミオン様！」

「元A級冒険者を一撃で再起不能にしたという、あの撲殺姫か！」

「前宰相ゴドウィン様を大講堂の屋上から叩き落とし、文字通り失墜させた『悪徳宰相飛翔事件』の首謀者……まさか、こんな華奢な小娘が!？」

「は、離れろ！ 殴り殺されるぞ！」

私達を取り囲もうとしていた門兵の方々が、蜘蛛の子を散らすように離れていきます。

まあ、失礼な。人のことをまるで怪物のように言うなんて。

「大袈裟おおげさですね。命まではとりはしませんよ。ただ——死ぬほど痛いだけですわ」
次の獲物は、この門兵の方々ですね。

ポケットから取り出した手袋をはめ、微笑みながらボキボキと指の関節を鳴らして足を踏み出します。

「ひっ」と、門兵の口から小さな悲鳴が漏れました。

小鳥のさえずりのように可愛らしいそのお声に、私はにこやかに微笑み、一息に距離を詰めようとして——

「神をも恐れぬ不屈ふくき者め！」

鋭い声とともに飛んできた鉄球を、首をわずかに傾けてかわします。

せっかちですわね。メインディッシュは最後までとっておくつもりでしたのに。

「聖門を砕くとは、なんと罰当たりな！ 異端なる魔女め！ この私が直々じきじきに正義の鉄槌てつづいを下してくれる！」

いつの間にか見張り台から下りてきていたジャルモウさんが、ブンブンと鉄球を振り回しながら近づいてきます。

確かあのモーニングスター、女神パルミアから託された魔道具だと言っていましたか。

見たところ、ただの野蛮やばんな鉄の武器にしか思えませんが、一体どんな力が込められているのでしょうか。

「鍛え抜いたこの身体から繰り出される鉄球の一撃、避けられるものなら避けてみよ！——ぬう

ん！」

その声を上げ、ジャルモウさんは鉄球を振り回したのですが……

「ぐべっ!？」

鉄球が傍そばにいた門兵の顔に、運悪く直撃しました。

顔面が潰れたその方は、顔を押さえて血溜まりにうずくまります。

味方であるはずのジャルモウさんに攻撃され、門兵の方々は困惑した顔で叫びました。

「な、なんで俺達を攻撃する!? アンタの標的はあっちだろう！」

「大いなる行いおんごに多少の犠牲はつきものです！ 運が悪かったとお思いなさい！」

隣でジュリアス様がうわあ……というお顔をなさっています、あの、このお方、貴方が将来統治するパリスタン王国の国教幹部なのですからね。他人事じゃありませんよ。

「今度こそ外しませんよ！ 喰らいなさい！ 我が正義の鉄槌！」

ジャルモウさんの渾身こんしんの叫び声とともに、風切り音を立てながら鉄球が飛んできます。

このような戦いの場で玉遊びのお誘いなんて、中々洒落しやれたことをしてくるではありませんか。よろしい。少しだけ付き合ってあげるとしましょう。

「ちよっとお借りしますね」

「えっ、あつ」

一番近くに立っていた門兵から槍やりを取り上げます。

長さといい軽さといい、ちょうどいい具合ですね。これなら申し分ないでしょう。

「バカめ！ そのような貧弱な槍で、この『神なる雷槌』をどうにかできるのですか！ 自らの罪を懺悔しながら潰れなさい——」

「えいつ」

槍をフルスイングして鉄球を弾き飛ばします。

音速を超える速度で打ち返された鉄球は目にも留まらぬ速さで飛んでいき、ジャルモウさんのお腹に激突しました。

「おぐう!？」

お腹にめり込んだ鉄球を抱きかかえるように、ジャルモウさんが顔を真っ青にしながら倒れます。その様はまるで、神に懺悔をしているようで、とても滑稽でした。

「残念ながら、許しを乞うのは貴方のほうだったようですね——はー、スッキリした」
よいものを見せていただき、ありがとうございます。

「手癖が悪くてごめんなさいね。これはお返しいたしますわ」

「え、あ、はい」

微笑みながら、なかばあたりでひしゃげた槍を門兵さんにお返しします。

幼い頃はよく、私の教育係だった執事長とこのような玉遊びに興じたものです。思わず童心に返って、えいつ、などとはしゃいだ声を上げてしまいました。お恥かしい限りですわ。うふふ。

「ぐふう……ど、どうやって、私の『神なる雷槌』を……っ」

血反吐を吐きながら、ジャルモウさんが地面を這っています。

「どうやって、とは異なることをおっしゃいますね。私はただ、なんの変哲もない鉄の槍で、貴方の鉄球を打ち返した。それだけです」

羽をもがれた蝶のような惨めな姿に、ついほっこりして笑みがこぼれました。

いえ、違いますね。蝶がこんなに太っているのは、空を飛べませんもの。

それに、ジャルモウさんは蝶と呼ぶにはあまりにも醜悪すぎます。

そんな彼にふさわしいのは、そう——

「おわかりですか？ ——この豚野郎」

起き上がろうと顔を上げたジャルモウさん。その顎を掬うように殴り上げます。

「ぐはあああ!？」

王都グランヒルデの青空に、一匹の豚が天高く舞い上がりました。

「——『殴られれば、豚も空を飛ぶ』」

無理だと思えることであっても、とりあえず殴れば解決するという意味です。

今後は比喩表現の一種として、国中で使われることになるでしょう。

辞書に新たな言葉を加えてしまいましたね。おめでとうございます、ジャルモウさん。

「いや、貴女以外誰も使わないからな、そんな比喩」

感じ入っていたところでしたのに邪魔しないでくださいませ、ジュリアス様。

しかしあれですね。肩透かしと言いますか。最初、ジャルモウさんにはとても期待しておりましたのに、思っていたほどの爽快感はありませんでした。

地面に叩きつけられたジャルモウさんを眺めながら、その理由に思考を巡らせます。

「どうやら、ただ太っていて腹が立つ程度の相手では、もう私の拳は満足できないようです。舌ならぬ、拳が肥えてしまったのかしら。」

「な、なんと凄まじい力だ……」

「それになんという容赦のなさ……」

「俺たちなんかに止められるわけがない……」

一部始終をご覧になった門兵の方々は、完全に戦意を喪失された様子ですね。

賢明な判断でございます。兵士としては頼りないとも言えますが。

「勝敗は決した。諸君らも教皇の命を受けているとはいえ、我が王国の臣民である。こちらとて、いたずらに傷つけるのは本意ではない」

わざとらしく憂いを帯びた表情を浮かべたジュリアス様が、門兵達に手を差し出して告げました。「今回の一件、罪には問わぬ故、全員武器を捨てて投降せよ。よいな？」

「は、ははーっ！」

すべての門兵が武器を下ろし、地に頭を伏せます。

これにて一件落着でしょうか。若干消化不良なのは否めませんが。

まあ、私も久々の外出ですし、今日はこれくらいで勘弁して――

「私の正義はア！ まだ……っ、負けてないい！」

「な、なんだっ!? ぐわああ!？」

「ひぎゃっ!？」

そんな声を上げながら、門兵の方々がジャルモウさんの鉄球に吹き飛ばされていきます。

あら、存外にしぶとかったんですね。まだ立ち上がれるなんて。

「はあ、はあ……許しません、許しませんよ……女神に仇なす魔女めエ……!」

立ち上がったジャルモウさんは、僧服があちこち裂けてはいるものの、私が与えたはずのダメージがいくらか回復している様子でした。

治癒魔法……にしては、それらしい素振りがありませんでしたね。

これは、まさか――

「魔女の穢れた拳ごときで、このジャルモウが倒れると思ったたら大間違いです！ 私にはこの――聖少女の首飾りがあるのですからね！」

そう言っつて、ジャルモウさんは胸元から青白く光る首飾りを取り出しました。あれには見覚えがあります。

「……やはりそうでしたか」

――聖少女の首飾り。

加護の力に匹敵する、強力な自動回復効果を持つ魔道具です。

魔道具はいくつかの等級に分けられているのですが、その中でも世界にひとつしかない稀少なものを幻想級と呼びます。

あの首飾りは奴隷オークション事件の時、瀕死の重傷を負ったゴドウィン様を一瞬で回復させる

ほどの効果を發揮しました。それを考えると、あの首飾りは幻想級だと思っていたのですが——まさかもうひとつあったなんて。

これは少々面倒なことになりましたね。

「驚いたようですね？ これは模造品ですがね。ただし治癒の効果は絶大です！ さあ、続きを始めましょう。先ほどは少々油断しましたが、次はそうはいきませんよ！ 今度こそ、貴女の脳天にこの正義の鉄槌を——」

「デイ、ディアナ聖教の聖女守護騎士団だ！」

意気揚々と口上を述べていたジャルモウさんを遮るように、見張り台に残っていた門兵が叫びました。

聖教区内に目を向けると、純白の鎧を身につけた騎士達が、馬でこちらへ駆けて来るのが見えます。聖女守護騎士団。ディアナ聖教の抱える騎士団であり、大陸最硬と名高い方々でございます。

パルミア教が勢力を拡大する中、ディアナ聖教が同じ聖教区内にとどまり続けていられるのは、彼らの力によると言っても間違いでしょう。

私達はもともと、聖門で彼らと落ち合う約束だったのですが……そう思えば随分と遅いご到着ですわね。……あら、よく見れば鎧が血で汚れていらつしやいます。どこかで足止めでも食らったのでしょうか。

「くっ……仕方ありませんね。どうやら今日はここまでのようです。ですが！ 次に会った時は、今度こそ貴女に聖なる鉄槌を下して差し上げますからね！」

そんな捨て台詞を残して、ジャルモウさんが私達に背を向けて走り去っていきました。

自国の第一王子に躊躇なく牙を剥く狂信者でも、数には敵わないと踏みましたか。

「……まったく、舐められたものですわ」

守護騎士団の姿を見て逃げ出すということは、私一人が相手であれば倒せると思っていたということでしょう。これは少々、腹立たしいですわね。

「その思いがり、いずれ絶対に矯正して差し上げます。首を洗って待っていてくださいな、パルミア教のジャルモウさん」

守護騎士団が到着して周囲が慌ただしくなりはじめた中、私は今後の方針を定めて一人拳を握り締めるのでした。

「やれやれ、これはまたひと波乱起りそうだな。貴女がいると本当に退屈しないな、スカーレットよ」この腹黒王子……なにをしたら私が元凶であるかのように語ってるんですか。

今回に関しては、どう控えめに見ても、私は巻き込まれただけですからね。もうっ。

聖門での騒ぎのあと、私達は守護騎士団の方々に護衛されながら聖教区内に入りました。

馬車で行くこと約五分。ようやく目的地に到着です。

青い屋根に大きな鐘。青みがかった灰色の、巨大な石造りの建物。

ディアナ聖教団の総本部、ディアナ聖堂です。

パリスタン王国でも屈指の歴史を誇る建造物ですね。